《本号の表紙絵》

吉益東洞の肖像画

（武田科学振興財団 杏雨書屋 所蔵）

吉益東洞の祖先は，室町時代の足利家の管領であった畠山政長であり，その子孫は紀州に領地を持ち，江戸初期紀州の国主浅野氏に仕えた．浅野家が広島安芸に国替えになった時に，畠山一族も広島に移住した．東洞は父畠山重宗と母花の間に，元禄15年（1702）広島で生まれ，始め金瘡産科の術を学んだが，後，古医方の研究に励んだ．安永2年（1773）京都で亡くなっている．

江戸の元禄文化の栄華が翳りを見せ始める時代であり，医療の世界でも大きな変革が起こり，曲直瀬道三以来の後世派医学に代り，古方医学が隆盛を見る．その中心的な役割を果たしたのが吉益東洞である．一切の理論を廃し，実見を重んじ，万病唯一毒という激しい主張は多くの賛同者とともに反撥を抱く者を生んだ．吉益東洞の肖像画はその主張に応じて，厳しい顔貌のものから，柔和な顔貌のもの，また風折烏帽子狩衣貫姿，無冠狩衣姿などが伝わっている．

例えば，呉秀三・富士川游著の「東洞全集」巻頭に掲載されているのは，娘婿で医者でありながら画家でもあった二宮桃亭が描いた肖像画で，東洞の命により無冠狩衣姿である．眼光鋭い厳しい顔貌の画である．また東洞没後，寛政8年の中野康章氏所蔵の画は，東洞と息子南涯の二人が描かれている．

その他，小曽戸洋氏によれば，武田科学振興財団杏雨書屋を始めとして数多くの東洞肖像画が伝わっている．

本画では羽織をまとい，扇子を持ち，小刀を佩し，座前に脱帽した頭巾を置いている．概して厳しい顔貌で描かれることが多いが，本画のように柔和なものは珍しい．画家は不詳．上部に南涯の自筆で「死生有命，救疾之慎，万病一毒，毒去無疢．右謹写先人東洞所讃於自像之語，吉益猷」の賛があるから，東洞没後（1773～）南涯没前（～1813）の作であることがわかる．大塚敬節旧蔵，武田科学振興財団杏雨書屋所蔵品．

（山崎　正寿）